心理学専修

教　授　　蘆田　宏　　視覚科学　(感覚情報処理，視覚認知)
教　授　　黒島　妃香　　比較認知科学　(動物、知性、感情、進化)
准教授　　森口　佑介　　発達科学　(認知発達，脳発達，自己制御，想像力，経験)
講　師　　Duncan A. Wilson　　比較心理学・霊長類学

〔主要著書・論文等〕
蘆田「Comparing measurements of head motion and centre of pressure for body sway induced by optic flow on a head-mounted display.」 *Frontiers in Virtual Reality*, 3:1026718 (2022, 共著)
黒島「Does own experience affect perception of others' actions in capuchin monkeys (Cebus apella)?」 *Anim Cogn*, (2014, 共著); 「誤解だらけの”イヌの気持ち」(4 章) 財界展望新社、2015; 「Experience matters: Dogs (Canis familiaris) infer physical properties of objects from movement clues.」 *Behav Processes* (2017, 共著)
森口「自分をコントロールする力　非認知スキルの心理学」(講談社新書, 2019)；「おさなごころを科学する：進化する乳幼児観」新曜社，2014
Wilson 「Exploring attentional bias towards threatening faces in chimpanzees using the dot probe task.」 *PLoS ONE* (共著，2018)

人の心の働きについては，古来さまざまな視点から研究されてきているが，心理学は，思索や深い省察ではなく，客観的な行動の観察に基づいて，心の働きにまつわる諸法則やそのメカニズムを実証的に研究する科学である。心理学は広範な基礎・応用分野をもつが，本専修は認知を中心とする基礎的領域を扱っている。専修は，基礎心理学，実験心理学および基礎行動学の 3 分野で構成されるが，各分野は相互に密接な連携をもちながら大学院教育および研究を進めている。修士課程では，心理学の基礎的な分野について専門的理解を進め，博士後期課程では，専門的研究をさらに深め博士論文の作成をめざす。大学院生には，広い学際的視野に立って神経科学，生物科学，言語科学，情報科学などの関連分野に深い関心をもち，早期に研究テーマを決め，手足を動かして，それぞれの問題に深く切り込むことが求められる。また国際性を高め，英文の学術誌に研究成果を公刊することを目標に置いてほしい。

現在の教員が取り組んでいる研究テーマは多岐にわたるが，以下に主なものを記す。個体が示す知性や感情の働き及びそれらの進化と発達を，成人，乳幼児，及びヒト以外の多様な動物を対象として，行動的分析および認知神経科学的手法により明らかにしようとする研究(黒島、森口，Wilson)、基礎的な環境の知覚や認知，記憶，思考などの働きを，精密な行動実験を通じて分析するとともに，その脳内基盤をも明らかにしようとする研究(蘆田)などである。各教員は，それぞれ特色のある研究活動を国際的に展開している。心理学専修の各教員の現在の研究についてさらに深く知りたければ，次の URL を参考にされたい (http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/psy/)。

本専修教員はいずれも京都大学「こころの科学ユニット」(https://www.kokoro-unit.kyoto-u.ac.jp/)に参加している。また，本研究室では，学術誌「心理学評論」の編集に携っている。なお，本専修では、公認心理師受験資格のために必要な大学院修士課程レベルの科目は提供されな

い。

言語学専修

教　授　　定延　利之　　記述～理論言語学，日本語
教　授　　千田　俊太郎　　記述言語学，パプア諸語，朝鮮語，エスペラント
准教授　　キャット，アダム　印欧諸語歴史言語学，古期インド・イラン諸語，トカラ語
講　師　　大竹　昌巳　　文献言語学，契丹語

〔主要著書・論文等〕
定延利之『認知言語論』（大修館 2000），同『ささやく恋人，りきむレポーター』（岩波書店 2005），同『煩悩の文法』（筑摩書房 2008），同『コミュニケーションへの言語的接近』（ひつじ書房 2016），同『文節の文法』(大修館書店 2019)，同『コミュニケーションと言語におけるキャラ』（三省堂 2020）.
千田俊太郎「日本語の動詞語幹とアクセントに關する覺え書き」『ありあけ：熊本大学言語学論集』19，2020，同「ドム語の「一」を表はす形式とその用法について―同一性、唯一性、非現實性、個々別々性、不定性、特定性―」『言語記述論集』12，2020, Kial multas adjektivoj en Esperanto? Komparo kun la korea, la japana, Dom, Tokpisino kaj aliaj lingvoj. Esperantologio / Esperanto Studies 3(11), 22–54, 2022.
キャット，アダム The Derivational Histories of Avestan *aēsma-* 'firewood' and Vedic *idhmá-* 'id.' In Stephanie Jamison, H. Craig Melchert, and Brent Vine (eds.), *Proceedings of the 25th Annual UCLA Indo-European Conference*, 39–48. Bremen: Hempen, 2014. 同 Tocharian B *ly(ī)ptsentar*: A New Class VIII Present. *Tocharian and Indo-European Studies* 17: 11–27, 2016. 同 Vedic *vrādh-* and Avestan *uruuād-*/*uruuāz-*. In Adam Alvah Catt, Ronald I. Kim, and Brent Vine (eds.), *QAZZU warrai: Anatolian and Indo-European Studies in Honor of Kazuhiko Yoshida*, 21–33. Ann Arbor: Beech Stave, 2019.
大竹昌巳 Reconstructing the Khitan vowel system and vowel spelling rule through the Khitan Small Script, *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae* 70(2), 2017，同「契丹小字文献における「母音間の g」」『日本モンゴル学会紀要』46, 2016，同「契丹小字文献における母音の長さの書き分け」『言語研究』148, 2015.

本専修は，明治 41 年(1908)に開設された言語学講座を継承するもので，記述言語学，歴史比較言語学をはじめ一般言語学理論やフィールド言語学の方法，あるいはそれらを基盤とする個別言語に関する研究と教育が行われている。研究教育内容は現代言語学のほぼすべての領域をカバーしている。2023 年度の授業科目は，特殊講義科目として「モンゴル語族史概論」，「契丹語研究序説」，「リグ・ヴェーダを読む」，「日本語話しことばの文法Ⅰ」，「同Ⅱ」，“Khotanese and Iranian Linguistics”，“Tocharian and Indo-European Linguistics”，「中国語音韻学：中古音について」，「中国の方言について」，「多言語情報処理論」，「認知構文論」，「認知意味論研究」，「会話分析入門：やりとりの中の言語と行為」，「ソグド語文献から見る文献言語研究」，「英語の音声・音韻」，「バントゥ諸語概説」，「シベリア諸言語研究」，「コーパスと言語研究」，「統語論研究」，「言語の対照研究」，「古代エジプト語の理解に基づく古代エジプト史研究」，演習科目として「調音音声学」，「「魅力的な日本語」・

「難しい日本語」を題材とした日本語学・日本語教育的探究」,「動詞意味論」,「日露法廷通訳論」,「パンデミック時代のロシア語」,「ロシア語の動詞接辞の諸相」,「「ルスキー・ミール」批評」が開講されている。この他演習には必修科目として「言語学の諸問題」,「個別言語と一般言語理論(1)」,「同(2)」が設けられ，院生の研究発表とその内容についての議論が行われる。現在，修士課程に 17 名，博士後期課程に 7 名，計 24 名の院生が在籍する。そのうち 11 名が留学生である。また研究室には，ほかに学部学生が 29 名，研究生が 3 名所属し，研究生は全員が留学生である。学生の最近の研究内容は，記述言語学，歴史比較言語学，類型論，音声学，音韻論，統語論，意味論，談話文法，語用論，生成言語学，認知言語学など多岐にわたっている。また対象とする言語も日本語，朝鮮語，英語，タイ語，中国語，アイルランド語，ツングース諸語，リトアニア語，ゴート語，ギリシア語，サンスクリット語，ベトナム語，ビルマ語，アラビア語，モンゴル語，トルコ語，スワヒリ語，シンハラ語など，洋の東西を問わずさまざまである。なかには，日本の方言や琉球語，台湾やミャンマー，フィリピン，タイ，中国，モンゴル，アフリカなどで話されている少数民族の言語などの調査に出かける学生もいる。文献を頼りに古語の記述をめざす学生もいる。

過去数年間に提出された修士論文のテーマには次のようなものがある：「量詞の判断基準に関する日中対照研究―「方」と「者」,“方”と“者”を例として―」,「ビジ語の境界音調とアクセントーその起因とプロセスに関する考察」,「現代日本語の条件節中に出現しうるモダリティ形式についての分析」,「Twitter における日本語名詞化接尾辞の用法」,「韓国語における派生と屈折について：形容詞副詞化接辞「-i」を中心に」,「基準時直前の事態であることを表す朝鮮語の時間副詞について」,「ダグル語の形動詞に付く所有人称接尾辞について」,「呉語青田方言の音韻体系について」,「パイワン語のリンカーについて」,「シンハラ語における韻律の音響分析―動詞を中心に―」,「古代ギリシャ語における ā-語幹名詞・形容詞の機能と分布」,「トゥチャ語の声調に関する考察」,「琉球語喜界島上嘉鉄方言の記述的研究」, *Syntax and Semantics of Contrast Sluicing*; *On the Interpretation of Wh-interrogatives: A Formal Semantics Approach*; *Focus and Defocus in Cantonese Right Dislocation and its Syntactic Derivation*. また代表的な課程博士論文については次のようなものがある：「ベトナム語北部方言の音節内部構造の実験的研究」,「南琉球宮古語史」「ベトナム語の指示詞に関する諸問題―理論と記述―」,「スワヒリ語マクンドゥチ方言の文法―名詞と動詞を中心とした記述と分析―」,「モンゴル語の母音に関する総合的研究」,「アイルランド語中性名詞の衰退に関する研究」,「認識視点と因果―日本語理由・目的表現の研究―」,「ロシア語不定代名詞の分布―否定が関わった環境を中心に―」, *An Optimality-Theoretic Analysis of the Japanese Passive*; *A Semantic Approach to Illocano Grammar*; *A Phonological Study of Yanbian Korean*.

現在における言語学の多様性は院生の研究テーマに反映されるだけでなく，その研究活動にも現れている。研究室には常に数種の私的研究会が設けられ，多様なテーマのもとに外部の若手も交えて自由活発な研究交流がみられる。年 3 回行われる言語学懇話会では，各方面で活躍する卒業生たちの多種多様な研究成果に親しく接することができ，その後で行われる懇親会も諸先輩と知り合う良い機会になっている。

学生たちの研究会の様子

社会学専修

教　授	太郎丸　博	社会階層論，数理社会学，社会学方法論
教　授	岸　正彦	沖縄、生活史、社会調査方法論
准教授	田中　紀行	社会学史，社会学理論，知識社会学
准教授	Stéphane Heim	経済社会学，産業社会学，　組織論
准教授	丸山　里美	ジェンダー研究、福祉社会学
(兼)准教授	安里　和晃	移民研究、アジア研究、社会福祉論
客員教授	筒井　淳也	計量社会学、家族社会学

〔主要著書・論文等〕

太郎丸『人文・社会科学のカテゴリカル・データ解析入門』ナカニシヤ出版，2005,『フリーターとニートの社会学』世界思想社，2006(編著),『若年非正規雇用の社会学』大阪大学出版会 2009.

岸『同化と他者化――戦後沖縄の本土就職者たち』ナカニシヤ出版、2013 年,『断片的なものの社会学』朝日出版社、2015 年,『マンゴーと手榴弾――生活史の理論』勁草書房、2018 年,石岡丈昇・丸山里美共著　『質的社会調査の方法――他者の合理性の理解社会学』有斐閣、2016 年,北田暁大・筒井淳也・稲葉振一郎共著　『社会学はどこから来てどこへ行くのか』有斐閣、2018 年,打越正行・上原健太郎・上間陽子共著　『地元を生きる――沖縄的共同性の社会学』ナカニシヤ出版、2020 年,岸政彦編著　『東京の生活史』筑摩書房、2021 年,岸政彦編著　『生活史論集』ナカニシヤ出版、2022 年,石原昌家・岸政彦監修　沖縄タイムス社編　『沖縄の生活史』みすず書房、2023 年

田中『近代日本文化論 4　知識人』岩波書店，1999 (共著),『歴史社会学とマックス・ヴェーバー(上)』理想社，2003(共著),『モダニティの変容と公共圏』京都大学学術出版会，2013 (共編著)，『W. シュルフター著作集 5 マックス・ヴェーバーの比較宗教社会学』風行社，　2018（監訳）.

Heim “Economic Sociology and the Theory of the Firm: Lessons from the “Toyota Momentum” in the History of Capitalism”, *Kyoto Journal of Sociology*, Vol. 24, pp. 83-93, 2016, “Biopolitics and bureaucracy. The tragedy in three acts of the decay of Japanese national universities”, *Savoir/agir*, Vol. 37, No.3, pp. 107-113, 2016.

丸山『女性ホームレスとして生きる――貧困と排除の社会学』世界思想社, 2013, 『質的社会調査の方法――他者の合理性の理解社会学』有斐閣, 2016（共著）, 『貧困問題の新地平――〈もやい〉の相談活動の軌跡』旬報社, 2018（編著）, *Living on the Streets in Japan: Homeless Women Break their Silence*, Trans Pacific Press, 2019.

安里『労働鎖国ニッポンの崩壊』ダイヤモンド社,2011(編著), “Nurses from Abroad and the Formation of a Dual Labor Market in Japan” *Southeast Asian Studies*, Vol. 49, No.4：642-669,2012(共著),『親密圏の労働と国際移動』京都大学出版会,2018(編著).

筒井”Junya Tsutsui, 2019, *Work and Family in Japanese Society*, Springer.”,”Junya Tsutsui, 2013, *The Transitional Phase of Mate Selection in East Asian Countries*,” International Sociology 28(3): 257-276. ,筒井淳也, 2015, 『仕事と家族』中公新書,筒井淳也, 2021, 『社会学』岩波書店

社会学専修は社会学，社会人間学，比較文化行動学および比較社会学の各分野から構成されている。大学院教育は以上 4 分野で実施され，相互に緊密に結びついて社会学専修のカリキュラムを構

成している。

本専修が伝統的に重視してきたのは社会学理論の厳密な読解である。近代市民社会の成立と共に生まれた社会学の学説史的検討と諸社会理論の摂取は，本専修の伝統であり土台である。その一方で今日，われわれをとりまく社会は大きく変わろうとしている。社会制度や構造さらには価値観，社会意識にいたる現実の変化をとらえ分析する社会学が求められている。こうした状況の中で，本専修が特に力を入れているのが，具体的なデータに基づく社会と社会生活の批判的・実証的分析である。社会学分野では歴史資料を駆使した近世・近代社会や家族のダイナミクス分析，社会人間学分野ではカルチュラル・スタディーズの手法を用いた現代社会の矛盾の解明や数理モデル，計量的手法を駆使した階層・格差分析，比較文化行動学分野においてはフィールドワークやディープインタビューの手法を取り入れた実証的コミュニティ研究，そして比較社会学分野では，現代資本主義社会の変容を比較社会学的に研究する。授業は文学研究科だけでなく，京都大学で社会学を研究する他研究科，研究所に所属する多数の教員の協力によっても行われる。また，毎年国内外の大学からも多彩な非常勤講師を招いて開講される。年度によってテーマや講師の顔ぶれは交替するが，ジェンダー・セクシャリティ，地域社会，スポーツ，福祉，現代社会理論，社会調査法などの個別領域の研究が提供されている。

社会学専修を希望する学生には，海外の文献を読みこなすのに十分な語学力とそれを厳密に理解し分析する理論的能力が要求される。さらに具体的な問題意識をもって文献を渉猟し経験的な調査を自ら企画・実行する能力が期待される。社会学的な考え方を学びながらあくまでも具体的なテーマに知的好奇心を失わない学生を歓迎する。

地理学専修

教　授　米家　泰作　　歴史地理学，東アジアの環境史
准教授　埴淵　知哉　　都市地理学，健康地理学
講　師　杉江　あい　　社会地理学，開発地理学，地域研究（南アジア）

〔主要著書・論文等〕
米家『中・近世山村の景観と構造』，校倉書房，2002,『モダニティの歴史地理』（共訳），古今書院，2005. 『森と火の環境史』，思文閣出版，2019.
埴淵『社会調査で描く日本の大都市』(編)，古今書院，2022. 『地域と統計―〈調査困難時代〉のインターネット調査』(共編)，ナカニシヤ出版，2018. 『社会関係資本の地域分析』(編)，ナカニシヤ出版，2018.
杉江　"Solidarity economy versus neoliberalism?: microcredit in rural Bangladesh."*Journal of Business and Economics* Vol. 10, No. 9, 2019. "Do 'Islamic norms' impede inclusive development of women?: A case study of Islamic education for women in rural Bangladesh," In Awaya, T. and Tomozawa, K. eds. *Inclusive Development in South Asia*, Routledge, 2023.. 『カースト再考―バングラデシュにおけるヒンドゥーとムスリム』名古屋大学出版会，2023

当専修は，海外地域研究を含む地理学の幅広い領域の研究と教育の場です。そのため，上記専任教員に加え，他部局の先生方には学内講師として，学外からも非常勤講師の先生方に授業を依頼し，多様な講義の提供に努めています。

本専修は 1907 年，日本の大学では最初の地理学教室として創設されて以来，多くの優れた研究者を輩出してきました。教室の創設当初より史学科に所属していた関係から，歴史地理学や地理学史，古地図研究や海外地域研究などを大きな特色としてきました。

現在の院生たちは，これまでの教室の伝統や専任教員の専門分野にとらわれず，世界の地理学の研究動向に対する関心や現代社会の直面する諸問題への意識を踏まえて，それぞれ自由にテーマを設定し，研究に励んでいます。研究対象や調査・分析の手法，用いる資・史料やデータなど，いずれもきわめて多様です。また，調査地域も国内から海外まで，扱う時代も古代から現代まで広く対象としています。

大学院生と専任教員の全員が参加する大学院演習は，院生それぞれが研究の進捗状況を報告し，それに基づいて質疑応答や議論を行う重要な時間です。修士課程の院生は，卒業論文の内容によっては，それを加筆修正して学会誌に投稿を目指しつつ，2 年間で修士論文の完成を目指します。博士後期課程に進学あるいは編入した院生は，毎年度末に「研究報告」を提出して「指導認定」を受けますが，この「研究報告」は，学会誌に掲載された論文あるいは学会誌に投稿準備中の論文の内容をまとめたものであることが求められます。博士後期課程の院生は，投稿した数編や投稿準備中の論文をまとめて，課程博士論文を提出することを目標としています。

院生の皆さんには，院生同士の活発な意見交換も，指導教員による個別指導も，他の教員からのアドバイスも，それぞれの研究を進める上での大切な糧として，豊かな研究を実らせることを期待しています。地理学専修は，そうした院生の研究をさまざまな面でサポートできるよう，努めてい

ます。

京都大学地理学教室所蔵の絵葉書コレクション https://www.bun.kyoto-u.ac.jp/geography/postcard/